

一宮市三岸節子記念美術館

〈短歌ポスト〉入選作品（特別展「生誕120年 三岸節子展」）

選者 小塩卓哉（現代歌人協会理事）

【優秀作】

《自画像》 1925年 一宮市三岸節子記念美術館蔵

まえ髪を まっすぐに切り 見つめてる その瞳には 何が映るの^{うっ}

半田市 徳山 明子

〈評〉この「短歌ポスト」で一番詠まれてきたかもしれないのが、「自画像」の絵である。上句はこの絵に描かれている視線を描き、下句はその視線を放つ瞳に、作者が「何が映るの」と問い掛けている。左目と右目のトーンの違いがよく指摘されるが、人間の顔はそもそも完全に左右対称ではない。作者はだからこそこの絵にリアリティを感じ、瞳を通してこのおかつぱ頭の少女の胸中を読み取ろうとするのだろう。



©MIGISHI

《ブルゴーニュの麦畑》 1980年 名古屋市美術館蔵

穂の光 風に吹かれて 節子さん 喜びの声 聴こえてきそう

東京都小平市 松浦 知子

〈評〉黄色の絵の具が滴るような麦畑を見詰める節子の姿が、この絵を見ていて作者の脳裏に浮かんだのだろう。そして美しい風景にみとれている節子の「喜びの声」が聴こえてくるような気がしたのである。絵画には特に風が吹く描写もないが、第二句のように「風に吹かれて」としたところに作者の発見があるだろう。視覚、触覚、聴覚と感覚をフル回転させて絵を鑑賞しようとする姿勢が短歌から滲み出ている。



©MIGISHI

《さいたさいたさくらがさいた》 1994〜98年 一宮市三岸節子記念美術館蔵

渦を巻きのみこむ如く桜ばな節子の最後に力を与え

一宮市 富田 淳子

〈評〉節子晩年の渾身の大作「さいたさいたさくらがさいた」もまた、「短歌ポスト」で多くの秀作を生んで来た。ダイナミックな表現の上句ももちろんよいが、この歌の魅力は結句の「力を与え」ではないか。「与う」と終止形にせず、連用形になっている。絵を描き終えた節子が、この絵を見てまたさらに次を目指そうとしたのではないかという思いは、作者のものだけでない。だからこそ共感を呼ぶのである。



©MIGISHI

【佳作】

《鳥と女と》 1956年 高輪画廊蔵

肉が朽ち埴輪となって立ちつくす女は更に絵に残された

名古屋市 山川 藍



©MIGISHI

《運河の家》 1971年 個人蔵

空ひとつ水にも置けば家ゆらぎ絵具の底に運河が生まる

岐阜県海津市 館 正輝



©MIGISHI

《花（絶筆）》 1999年 一宮市三岸節子記念美術館蔵

黄色花 魂の叫びが 聞こえるぞ もっと描きたい もっと描きたい

一宮市 小西 泰三



©MIGISHI

作品指定なし

何度めか 今日も来ました 同いどし 母と節子は それぞれ生きた

岐阜市 栗田 道代

《囚》 1961年 堀美術館蔵

囚われた 鳥はもしや ニンゲンを 節子さんを おさえつけてる

一宮市立葉栗北小学校6年生 森下 紗奈



©MIGISHI

《さいたさいたさくらがさいた》 1994〜98年 一宮市三岸節子記念美術館蔵

人生の おわりをひらく 白いドア わたしはきっと 自分でひらく

一宮市立葉栗北小学校6年生 森下 紗奈

死の間際うねる大渦桜の樹永遠に咲く画家のほこりか

練馬区立大泉西中学校2年生 中村 柚花

《室内》 1938年 宮崎県立美術館蔵

見慣れてる 同じ景色に 同じ部屋 色で現れる 新たな景色

大学3年生 森田 於杜



©MIGISHI